

障がい児を対象とした学生サークル活動に関する実践報告

～障がいのある児童及びその保護者のスポーツ活動支援・第2報～

Practical Report on Student Group Activities for Handicapped Children
～Sports Activities Support for Disabled Children and their Parents, 2nd Report～

伊藤 弓月

Yuzuki ITO

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words : サークル活動、障がい児、運動あそび、ボランティア活動

1. はじめに

3年後の2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向け、マスコミ報道等においては『東京オリ・パラ』という言葉が盛んに用いられ、また、テレビCM等においても障がいのあるアスリートが自然に起用されるなど、今日の我が国において、障がいのある人々の取り組むスポーツ活動は広く認知されつつあるといえよう。だが、パラリンピックをはじめとする成人の障がい者を対象としたスポーツ活動が広く認知される一方で、障がいのある児童が取り組むスポーツ活動や運動あそび等となると、果たしてどの程度認知されていることであろうか。

前回の報告¹⁾において筆者は、本学就任前の宮城県障害者スポーツ協会在職中における、障がい児運動あそび教室『キッズ・サポート』の企画立ち上げから実施に至るまでの一連の経緯について報告を行った。そこで今回は第2報として、前述の『キッズ・サポート』のコンセプトを継承し、主に障がい児を対象とする運動あそび教室『りんごの輪』の開催・運営を活動目的とした、本学学生サークル『セルクル』の立ち上げから現在に至るまでの活動状況、また今後の課題について報告する。

2. サークル結成までの経緯

平成24年4月に筆者が本学に着任した際に、幼児保育学科2年生を対象とした担当科目の講義内において、自己紹介を兼ね、前述の『キッズ・サポート』に関する取り組みについて簡単な紹介をおこなった。すると後日、講義を受講した学生数名より、自分達も同様の取り組みを行ってみたいとの申し出があった。当時、筆者は勤務外における自主的な取り組みとして、仙台（宮城）に続きこの青森の地においても、障がい児を対象とした運動あそび教室（以下、教室と略す）を開催すべく動き出そうとしていた矢先のことであった。

予期せぬ学生達からの申し出に驚いたものの、その熱意を受け止めることとなり、筆者は当初の教室開催構想から、良い意味で軌道修正の必要性に迫られた。結果として、それは学生達の自主的なサークル活動による教室開催となり、筆者はその実現に向けサークル顧問という形で関わっていくこととなった。

教室の開催を希望した学生達に対し、まず筆者は最初に、前職において県の委託事業として実施していた教室の開催は、決して容易でないことを説いた。教室の開催は、各種運動や趣味的活動といった、ある種の自己満足的な性質を持つ学生サークル活動とは違い、地域の福祉ニーズに応えるといった、ボランティア活動の基本原則²⁾（自発性・社会性・無償性・公共性など）に則った活動であることを学生等に伝え、その覚悟を問い質した。次に、運営主体となるサークル結成に向け、後に初代サークル代表となる学生他2名に対し、本学学長の下に赴き、趣旨説明並びにサークル結成の同意を得てくるよう指導を行った。本来、新規学生サークルの結成・登録に関して、本学には『学習支援センター』という専門の部署が存在する為、直接学長に許可を得に行く必要性はない。しかしながら、学生サークルによる教室運営を考えた場合、ある程度、大学側からの協力・支援体制を取り付けなければ教室の開催は困難であるとの判断からであった。特に教室の会場として考えていた本学体育館を確保することに関しては、本学のみならず併設の4年生大学の各運動系サークル等も常時使用しており、その確保が困難であることが事前に予想された。そこで、教室が単に学生サークル活動のみならず、本学の地域貢献活動の一環でもある位置付けにもっていくことで、大学側からの支援体制を引き出すという狙いが筆者の中にはあった。ちなみに学長から学生達に対しては、筆者と同様にその覚悟を問うと共に、まずは教室開催に向けた事前学習や準備をしっかりと行うようにとの助言があったようである。

以上の経緯を経て、平成24年7月に有志学生達より大学側へ学生団体結成願い（サークル結成の届け出）が提出、その後に受理されたことによって、主に障がいのある児童を対象とした運動あそび教室の開催・運営を行う、青森中央短期大学の学生サークル『セルクル』が誕生した。サークルには本学幼児保育学科2年生11名、同1年生1名、専攻科福祉専攻13名の計25名の参加登録があった。ちなみにサークル名の『セルクル』とは、サークル(cercle)のフランス語読みであり、障がいのある児童とその保護者と自分達とが手を取り合いながら交流を深めるという意味で、当時の学生等が命名したものである。

なお、サークル結成初年度から現在（H28年度）までの5年間のサークル登録学生数は、表1の通り^{注1}となっている。

表1 年度別セルクルサークル登録学生数

年 度	登録数	内 訳
平成24年度	25名	幼2年11名、幼1年1名、専13名
平成25年度	20名	幼2年12名、幼1年2名、専4名、看1年2名
平成26年度	8名	幼2年4名、幼1年1名、専2名、看2年1名
平成27年度	8名	幼2年5名、食1年1名、幼1年2名
平成28年度	19名	食2年2名、幼2年5名、幼1年4名、専3名、4看1年5名

食＝食物栄養学科、幼＝幼児保育学科、看＝看護学科、専＝専攻科福祉専攻、4看＝青森中央学院大学看護学部

注1：あくまで登録者数であり、実際の活動学生数は登録者数を下回る（各年度共通）

3. サークル活動の開始

正式に発足したセルクルサークルであったが、年度途中のサークル結成且つ活動初年度ということもあり、当該年度の活動計画としては、①障がい児・者に対する理解を深めること、②（他所で実施される）障がい児を対象としたボランティア活動へ積極的に参加することとし、いきなり教室の開催ということではなく、まずは教室開催にあたり必要な知識や経験を積むという活動方針を掲げた。但し、2年生卒業までの間に試験的な意味合いで教室を開催するという目標も併せて掲げた。

サークル結成後、最初に学生達が行った活動は、筆者の元職場であり、宮城県障害者スポーツ協会が主催する、障がい児運動あそび教室『キッズ・サポート』への参加であった（H24.9）。サークルに所属する9名の有志学生が筆者と共に仙台まで足を運び、実際の教室に参加して直接児童（やその保護者）と関わり、また教室の開催準備から運営・実施、後片付けに至る一連の過程を体験してきた。こうして“モデルケース”を直接体験したことによって、（教室開催における）学生間でのイメージ共有をほぼ確立できたことは、後の教室開催への大きな収穫であったといえよう。

そして、サークル活動の主力である幼児保育学科2年生の実習期間を挟んだ後、次に学生等が行った活動は、障がいに対する理解を深めるための学びであった（H24.11）。

筆者を講師として、身体障害や知的障害、発達障害等の基礎的理解に関する自主勉強会を放課後に3回実施した（11/2、11/5、11/9）。その内容は、筆者が実際に本学の専攻科福祉専攻（介護福祉士養成課程）で講義している「障害の理解」とほぼ同様の内容にプラスし、筆者が学生時代から現在までに至る障害者スポーツの現場における実体験を合わせた内容であった。

その後、幼児保育学科2年生が12月から1月に掛け、特別研究の執筆、ミュージカル（卒業公演）練習、教職実践演習の準備等に学期末試験があること、また同様に専攻科福祉専攻科は、修了論文の執筆、学期末試験、さらに卒業時共通試験（2月）とそれぞれ学業多忙となったことにより、サークル活動は2ヶ月以上の活動停止に入った。

4. プレ教室の開催

前項で述べたサークル活動停止中の中、サークル全体としての活動は無かったものの、サークル中心メンバーとの間で卒業時までの教室開催実現に向けた話し合いは続いていた。また、サークル活動停止中の中、筆者は弘前大学の教員と知り合う機会を得て、その際に筆者が教室の実現に向け動いている旨を伝えた。すると先方から主旨への賛同があり、結果として、本学学生と弘前大学教育学部特別支援教育専攻の学生さん達との合同により、教室の試験開催（プレ教室）を目指す運びとなった。これには保育（並びに介護）を専攻する本学学生と、特別支援教育を専攻する弘前大学の学生さん達との間で、障がいのある児童を支援する上で、互いの強み（専門性）を生かし、また足りない部分を補完し合えるような教育上の相乗効果を期待する意図があった。

プレ教室開催に向け、12月中旬より両校間による調整を開始した。はじめに、教室開催にあたっては、本学セルクルサークルが主導で進めることを確認の上、以後、具体的な事前準備に入った。

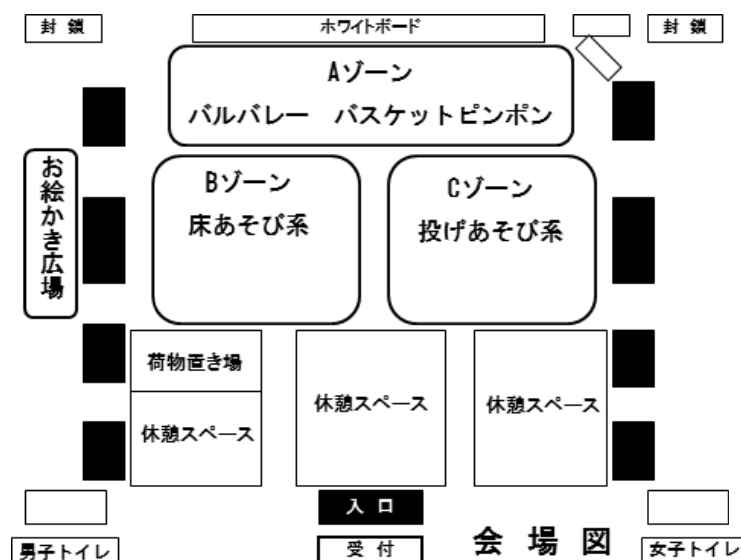
まずプレ教室の開催日時を年明けの2月23日（土）とし、参加対象児童の年齢設定は概ね3歳から12歳までとした。また、教室の開催時間については、児童の体力面や参加のしやすさを考慮した上で、午前10時から11時30分までの1時間半とし、参加者はその間の中で自由に入退場可能とした。

さらに、教室への参加は無料とし、事前の申し込み等も不要とした。なお、この基本的な枠組みについては、プレ教室開催から5年を経過した現在まで変わっていない。

当初より教室の会場は本学体育館を使用するつもりであったが、この時は諸事情により使用出来なかった為、教室の会場は本学学術交流会館2階の大講義室にて実施することとした。当該教室は前半分の椅子・机を撤去することにより、児童が体を動かすスペースの確保が可能であったことがその選定理由である。

教室の日時・会場・コンセプトといったアウトラインを確定させた後、次は教室のより具体的な中身の準備に移った。中でもとりわけ重要なことは、児童の運動あそびを実現するための遊具の確保である。結成間も無かったセルクルサークルは、当然のことながらそのような遊具を所有していなかった為、遊具は全て外部より借用することとした。まず、本学近くの青森県身体障害者福祉センター「ねむのき会館」が実施している、障害者スポーツ用具の無料貸し出し事業を利用し、用具6種（バルバレー、ポッチャ等）を借用した。次に、青森県レクリエーション協会より、用具12種（クロリティー、輪投げ等）、さらに本学体育館備品を10種以上（マット、バランスボール等）を借用の上、それ等を教室開催前日の放課後、会場となる大講義室に搬入した。これら遊具の設置を含めた会場レイアウトは、図1のように行った。他、遊具以外の準備物として、救急箱や嘔吐処理セット、ウォーターサーバー、雑巾・バケツ等を大学側より借用した。

図1 プレ教室会場レイアウト図



なお、周知宣伝に関しては、教室開催のチラシを作成の上、青森県子ども家庭支援センター（アピオ青森）や県立青森第二養護学校をはじめとする関係機関等に筆者や学生達が赴き、主旨説明の上、周知宣伝やチラシ配布の依頼を行った。

以上の準備を経て、平成25年2月23日(土)、セルクルサークル最初の教室を開催した。当日は大雪の最中、7組（児童9名・保護者7名、計16名）^{注2}の参加があった。

こうして、教室を自分達でも開催したいという学生達の熱意からはじまったセルクルサークルの初年度は、サークル結成、モデルケースの見学・参加、自主的な勉強会等の活動を経て、プレ教室の開催にまで至った。何も無いところからスタートし、現在まで続く教室の原型を築いたという意味で、初代代表をはじめとするサークル結成メンバーの功績は非常に大きいといえよう。

注2：受付をしなかった家族も存在し、実際の参加者は7組より多い。

5. 2年目以降のサークル活動状況

プレ教室の開催後、サークル中心メンバーである2年生の卒業を控え、次年度に向けサークル代表の交代・引き継ぎを行った後、教室の定期開催を活動目的にセルクルサークルの2年目がスタートした。2年目の本格始動にあたりまず学生達が行ったことは、プレ教室では無かった教室名称の設定である。当地青森をイメージし、教室名は『りんごの輪』と命名された。

以後、平成25年4月から平成29年2月までの4年間、セルクルサークルは『りんごの輪』を計13回ほど開催してきた。平成25年度以降の教室開催状況は表2の通りである。

表2 運動あそび教室「りんごの輪」年度別開催状況

年 度	開催数	参加人数 (内訳)	場 所
平成25年度	① 7 / 6 (土)	3組・8名 (児4名・保4名)	本学体育館
	② 9 / 28 (土)	0組	
	③ 12 / 7 (土)	6組 (詳細不明)	弘前学院大学体育館
	④ 2 / 8 (土)	6組・12名 (児6名・保6名)	本学体育館
平成26年度	① 5 / 24 (土)	4組・10名 (児6名・保4名)	
	② 2 / 14 (土)	10組・24名 (児13名・保11名)	
平成27年度	① 5 / 23 (土)	2組・4名 (児2名・保2名)	
	② 7 / 11 (土)	1組・2名 (児1名・保1名)	
	③ 11 / 8 (日)	6組・13名 (児6名・保7名)	
	④ 2 / 11 (木)	5組・14名 (児8名・保6名)	
平成28年度	① 7 / 16 (土)	5組・12名 (児7名・保5名)	
	② 11 / 6 (日)	6組・16名 (児10名・保6名)	
	③ 2 / 5 (日)	5組・10名 (児5名・保5名)	

児＝児童、保＝保護者

サークル結成2年目の平成25年度は、初年度に引き続き弘前大と連携しながら計4回の教室を開催した。本学と弘前大との日程調整の結果、初回教室の開催が当初目標であった5月のゴールデンウィーク明けから実際には7月上旬の開催と、やや遅くなった。

また表2にあるように、2回目の教室では参加者が無かった。この結果を受け、教室の開催時期や周知宣伝活動について改めて見直しを迫られた。

結果的には平成25年度のみとなってしまったが、この年の3回目の教室において、りんごの輪初の弘前開催が実現した。この時は弘前大にプラスして弘前学院大学と連携し、同大の体育館にて教室を開催した。

さらにこの年は、看護学科からサークル所属学生が現れると共に、所属に至らないまでも多くの看護学科の学生、さらには併設の青森中央学院大学経営法学部の学生等が教室に参加するなど、他大学や他学科学生との交流機会が多く生まれた。

サークル結成3年目の平成26年度は、年度開始直前に当初のサークル代表他、サークル主力メンバーが次々と辞めてしまったことにより、サークル存亡の危機を迎えた。またそのような状況にあっては、前年までの弘前大との連携を図れるような状態にあらず、この年は連携を見送り、まずはサークルの立て直しを図ることとした。

サークル顧問である筆者より、前年度の教室に参加経験のある幼児保育学科2年生に対し、事情を説明の上、サークルへの参加並びに教室開催の打診を行ったところ、4名の学生が快く応じてくれた。そこから立て直しを図り、結果として平成26年度は5月と2月に計2回の教室を開催した。初回の教室から半年以上の間が空いたにも関わらず、教室の開催を心待ちにしてくれていた児童やその保護者の存在もあり、計2回の教室はいずれも盛況であった。特に2回目、2月の教室ではその後も含めた中で過去最高の参加人数を記録するなど、教室に対する潜在的なニーズを改めて実感することとなった。

サークル結成4年目の平成27年度は、前年度の影響もあってか表1にもあるようにサークル所属学生数は少なかった。しかしながら、この年の代表学生や他のサークル所属学生の頑張りもあり、前年より倍増し計4回の教室開催となった。また、児童の保護者からの意見等を積極的に取り入れ、従来の自由な遊びにプラスし、教室冒頭の自己紹介や遊具に関する説明の導入、集団遊びや最後の片付けといった新たな試みも取り入れるなど、学生達による教室運営も更なる進化を遂げた。何より、継続して参加する複数の“リピーター”参加家族も現れるなど、4年目にして教室もようやく安定の兆しを見せた。さらにこの年は食物栄養学科からもサークル所属学生や教室参加学生が現れた。

一方で、サークル存亡の危機を脱したこともあり、改めて弘前大への声掛けを行ったものの、双方の学事日程の都合もあり、この年も本学単独での教室開催となった。

サークル結成5年目の平成28年度は、主力となる本学幼児保育学科2年生の実習時期変更の影響から、平成25年度に続き初回教室の開催を7月まで待たなければならなかった。その結果、この年の教室開催数は前年より1回減り、計3回の教室開催となった。

教室の開催数は減ったものの、前年度からのリピーター参加家族の存在もあり、教室参加者は毎回10名以上と常に安定していた。

また平成28年度は、世界的な奉仕団体である国際ソロプチミスト（青森）より、これまでの活動が認められることとなり、本学のSSSサークルと共に『青森中央短期大学シグマソサエティ』として認証を受け、支援を受けられることとなった。

しかしながら、前年度後半より教室参加学生数の減少が続いており、教室開催時は毎回参加学生の確保が大きな課題となっていた。

6. 今後の課題

教室の開催を目的として誕生したセルクルサークルであるが、活動開始から5年を経過した現在、当然のことながら課題もいくつか出てきた。その中から、特に筆者が注目する課題を2つ挙げる。まず1つ目の課題は、教室参加学生の確保である。教室開催初期の課題であった安定した集客については、前項で述べた通り、教室開催4年目後半よりその課題はほぼクリアされた。一方で、教室への参加を希望する学生数が年々減少傾向にある。

サークル結成初年度や2年目においては、サークルに所属しているかどうかは別として、教室開催に際し、10名程度の学生を確保することは比較的容易であった。ところが活動5年目を迎えた今日においては、その10名の確保すら困難な状況にある。学生の参加無くして教室の開催は到底あり得ない。5年という歳月の間に、学生達の福祉やボランティアに対する意識が低下してきているのであろうか。残念ながら現時点でハッキリした理由を筆者は見つけられていない。ただ、そもそも本学入学時点における食物栄養学科と幼児保育学科の両学科学生達の中であって、障がいのある児童を対象とした活動に興味を持っている学生が数多く存在しているとは考えにくい。むしろ、入学後の講義の中で障がいについて学んだり、あるいは同級生や先輩から誘われる形で興味・関心を持ち始めるのがごく自然な流れではないかと考えられる。

そこで一つの解決策として、例年入学式翌日の放課後に実施される学友会総会後のサークル紹介の場において、セルクルサークルの活動がいかにか魅力的でやりがいのある活動なのか、またサークル活動を行うメリットが何であるかを、いかに新入生に伝わるようプレゼンテーションできるかが重要なポイントであると考えられる。後述する2つ目の課題ともリンクするが、セルクルサークルの活動はどうしても土日・祝日になってくる為、日頃の学生生活の中でその活動を目にする機会が殆ど無い。したがって、新入生入学時は勿論のこと、学生達の日常生活の中において、セルクルサークルの活動が周知されるような何らかの取り組みや仕掛けが必要であると考えられる。

2つ目の課題は、サークル活動の活性化である。表2にあるように、過去5年間の活動においても年4回が最多の教室開催数であった。教室の開催だけが全てではなく、事前準備等も活動には含まれるにしても、年間トータルで見ればサークルとしての活動機会が少ない。代表学生も含め、年間でサークル活動に費やす時間は実質2週間程度である。果たしてそれが活発なサークル活動と言えるであろうか。しかしながら、短期大学での2年間（専攻科は1年間）という短い学びの時間の中で、栄養士や保育士（幼稚園教諭）、介護福祉士といった、国家資格取得やその他の資格取得を目指し勉学に励んでいる学生達に対し、更にサークル活動に勤しむようにとは言い難いのが実情である。

次に、教室の開催については、実習期間や試験期間、その他学校行事等の合間を縫いつつ、さらに本学体育館の使用可能な日に併せて決定していくという事情がある。よって、教室開催数の増加や、定期的な教室の開催などは現状不可能に近い。さらに、このような形で日程を組んでいく都合上、以前実施していた弘前大との連携なども極めて困難な状況である。

1つ目の課題で挙げたように、教室参加学生数の減少という現状がある中で今後の教室開催を維持

していく上でも、弘前大に限らず改めて青森市内の他大学との連携を模索する必要性もあると考えられる。

一方、本学幼児保育学科では、学生生活におけるサークル活動やボランティア活動の有用性に着目し、平成28年度より木曜2時限を「サークル・ボランティア活動」の時間と位置付け、この時間帯には通常講義を設定せず、学生達のサークル活動やボランティア活動を奨励する取り組みを開始した。だが、せっかくこのような取り組みが開始されたものの、セルクルサークルの教室開催は前述のように土日・祝日が前提であり、この時間帯に教室を開催する、あるいは児童やその保護者に来校してもらうことは実質不可能である。とはいえ、他のサークルがこの木曜2時限を有効活用していることもまた事実であり、セルクルサークルもこの時間帯を有効活用する必要性があると考えられる。

直近に開催した教室において、定期的に参加している児童の保護者より、教室を楽しみにしているあまり、児童が前日の夜から興奮してなかなか寝付けないとの話を聞く機会があった。また、ある参加児童からは、受付時に「やっとりんごの輪があった」、終了時に「今度はいつやるの?」との言葉を聞いた。残念ながら現状では教室開催時に次回開催の確実な約束を実現出来ていない。

数多くとは言えないまでも、教室の開催を心待ちにしている児童等が少なからず存在していることは事実であり、そのような児童や保護者のニーズに対し、今後も可能な限り応えていくべきではないかと考える。

その為には、本学の学生達がサークル活動やボランティア活動に参加する意義やメリットを見い出し、また実感出来るような取り組み、すなわち、福祉教育やボランティア学習の有用性について、サークル顧問である筆者を含め、大学側としても改めて検証する必要性があるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 伊藤弓月 (2015) 「障害のある児童及びその保護者に対するスポーツ活動支援～障害児運動あそび教室の運営を通して～」青森中央短期大学研究紀要28,99-102.
- 2) 巡静一・早瀬昇 (1997) 「ボランティアの理論と実際」,中央法規出版
- 3) 植木章三 (2007) 「大学における障害者スポーツ関連教育と地域貢献との融合～“パロリンピック”の企画・運営を通じて～」障害者スポーツ科学別冊 第5巻第1号,72-75.